

特集

こどもと家族が生きいきと 働くための就労支援

特集にあたって

“働きたい”という思いを育み、 それを支える存在として

皆さんはこども時代、どんな職業に就くことを夢見ていましたか。筆者は飲食店を営む家庭に生まれましたが、小学校時代の保健室の先生との出会いから、将来の夢は養護教諭になることでした。働くことは、経済的な側面はもちろんですが、幼いころの夢を叶える、仕事を通してやりがいや生きがいを感じるといった自己実現の側面、社会とのつながりを深めるといった社会貢献の側面など、さまざまな意味をもってします。

“こんな仕事に就きたい”というこどもたちの思いは、学校でのキャリア教育や人生経験を通してゆっくりと育まれていくのだと思います。本特集では、小中学校や特別支援学校などの学校教育のなかで行われているキャリア教育や支援の実践についても執筆いただきました。また、医療機関での支援の一つとして移行期医療に着目しました。移行期の支援目標として、こども自身の疾患理解やセルフケアの獲得を目指すことが重要ですが、このことは就労に向けた第一歩としても非常に大切です。疾患理解を基盤として、周囲の人への病気の説明や周囲に求める支援を説明する力をつけることは、エンプロイアビリティ(雇用される能力)を高めることにつながります。病気や障がいをもつこどもに必要な配慮は個別性が高く、雇用先と雇用される側で十分なコミュニケーションをとることが求められます。このような調整は単独の機関でできるものではなく、こどもと親、雇用先、医療機関、学校、地域

の関係者などが協働して取り組むことが重要です。

本特集では、病気や障がいをもつこどもだけでなく、親の就労にも焦点をあてました。こどもを産み育てていくなかで、親自身のキャリアを見つめ直す機会は多々あると思いますが、病気や障がいをもつこどもの親は、“働きたい”と願っていても、制度上の問題や付き添い環境上の問題などから、キャリアの中断を余儀なくされる場面が多くあるのが現状です。経済的な負担や将来の不安に加え、親自身の生きがいや居場所の喪失につながるものが指摘されています。一般的に知られる「小1の壁」にとどまらず、“病気や障がいをもつこどもの預け先が見つからない”“通院や親子通園を要するために仕事復帰が難しい”といった「介護休暇や育休明けの壁」、学校卒業後は放課後等デイサービスが利用できない”といった「学校卒業後の壁」など、幾多の壁が立ちはだかっています。

こどもたちや親が将来を描き、“働きたい”という思いが実現できるように、こどもと親の“働くこと”を支える際のヒントが少しでも多く得られることを願っています。

宮城大学看護学群小児看護学領域准教授／
小児看護専門看護師
名古屋祐子 Nagoya Yuko